

保育の本から

『育児日記からの子どもも学』を読んで

浜口 順子

はじめに

この本（勁草書房、一九九六）は、友定啓子さん、入江礼子さん、橋爪千恵子さん、榎田二三子さんという四人の母親が、わが子の育児日記をもとに保育の省察をおこなったものだ。今は中学生から大学生にまで成長した子どもたちの、おもに乳幼児期の、しかもきょうだい関係の中での成長

に焦点をあてて、記録を整理し、過去と現在の見方・理解の変化をたどりつつ、それぞれの自己発達論を展開している。

この本が出版されたことを知り、「友定さんたち、ついにやったのね」というのが第一印象だった。私が彼女たちと同じ大学の児童学科で、数年先輩として学んでいた頃から、育児をしながらわが子の記録を使って研究会をしている先輩グルー

プの存在を噂で聞いていた。たまにその会の資料（『遊びをみつめる』、四頁に言及）を見せてもらうことがあったが、その記録の量はもとより、母親として、共同生活者として子どもを語り、「客観的」記録をよしとする世間一般の研究規範にあえて挑戦しているかのような迫力を目の当たりにして、何かスゴイものが詰まっているような予感があった。あの頃から十数年たち、私も幼児教育を講じる職業につきながら、二児の母親をやっている。その私にとって、この本は二重にも三重にもいろいろな思いが折り重なって、読んでいて冷静に書評などしてられない状態になった。共感したり、身につまされたり、安堵したり、焦りを感じたり、考えさせられたり、希望を抱いたり……そのなかで、特に記録を書くこと、読むこと、ふりかえることなどについて考えたことを、客観的でなく、巻き込まれながらつづりたいと思う。育

児日記と母親の関係のように。

育児日記を書くこと

まず同じ母親として、コンスタントに記録を残してあることに敬意をおぼえた。私の場合、書くことはあっても、その都度形式がバラバラで、メモ帳、生活日記、最後まで埋まらない「育児日記」専用のノート（時々思い立って作った）、保育園の連絡帳、家計簿の隅など、今すぐ読もうとしてもかき集めるのに一苦労しそうな情けない状態だ。「面白い」とか「後から懐かしみたい」などの記念撮影的な動機で書くこともあれば、「混乱した頭を整理したい」という切実な場合もある。また行為の意味を探ったり、解釈を思いついたりという場合、そして「とにかく何か書いておけば後から研究に使えるかな」という職業病のような動機に至るまでいろいろで、たぶんこの点は

四人の著者たちと大きく違わないのではないかと
思う。ただ私の記録形式に一貫性がないのは、書
き続ける姿勢に自然さが欠けているのかな、と反
省させられた。

入江の場合、育児日記をつけ始めたのは、「自
然なりゆき」だという。肉体的な疲労から「何
日も記録をとれないこともあった」が「それでも
少しずつ続けたのは、いつか子どもたちの手が離
れたときにじっくりと楽しみながら考えてみたい
という思いがあったから」（三頁）だとしてい
る。「毎日新しいことをする長女がおもしろく
て」（榎田、一六九頁）、「おもしろいことが次々
出てくるので、記録に残しておかなければもっ
たいない」と思い」（友定、四九頁）など、各
人、記録を続ける姿勢に無理がない。一見、育児
をただ楽しみ、子どもに生活を捧げている母親の

「というのはどうもそういう次元のことではな
い、と私の記録と比べて思う。楽しみながらも自
分を見失っていない、というか、保育を自分から
切り離して考える時間を食欲なまでに把持し、保
育に巻き込まれきらないぞという気迫が持続して
いるのではないか。子どもとの生活にかまけ、そ
の日その日の楽しさで満足している（諦めてい
る）」と記録は書けない。これは経験上わかる。

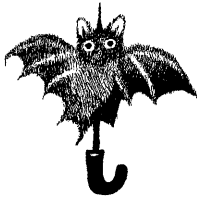
「家庭という二四時間保育をつづけるところで、
母子が密着してしまいそうとき、育児記録を書
くことにより子どもを他者として距離をもって見
ることができた」と榎田が回想するように、「書
くこと」は子どもと自分との精神的な距離の調整
時間を与えるものなのだ。四人の著者には、より
よい保育をめざす意志のもとに、それが再び子ど
もと出会うのに必要な過程として「自然に」実践

ことは実際にはなかなか難しいのだが、入江たちが互いの記録を読み合う機会をつくることで、その問題を協同して克服してきたというのは賢明だったと思うし、育児日記を「子ども学」につなげるための「策略」としては、非常に現実的で、親近感をもおぼえる。

ふりかえる時期

著者たちが幼児期のわが子の成長を、なぜ「今」ふりかえるのか気になった。幼児期をゆっくりとふりかえることのできる時期にはいったとしても、やはりなぜ今なのか。現在の私自身、三歳と八歳の子ともと生活し、この本で主題化されているきょうだい関係の葛藤に会わない日はない。小さなスパンでは日々の保育をたびたびふりかえる。それは今日や明日の保育のための、余裕のない追われるような作業だ。しかしこの本を読

んでいて、十数年を隔てた過去のわが子の成長を見つめる著者たちの視点に、今の私とどこか共通した切迫したものもまた感じた。彼女たちもいまだに育児まっ最中なのだ。現在の課題をかかえて、中学高校大学の子どもたちを育てている。幼児期に悩んだこと自体は乗り越えていても、また新たにわが子を理解しようとしている姿勢が伝わってくる。例えば「この記録を読み返した時、私は胸を突かれる気がした。Tの思いばかりでなく、Aの思いまでもがひしひしと伝わってきたからである」(橋爪、一三〇〜一三一頁、傍線筆者)という文はどういう心境を表しているのだろうか。当時子どもたちの気持



ちを十分汲んでやれていなかったと後悔したり済まなく思う、ということもある。しかしもっと前向きには、わが子の担う歴史を再認識し、それによって今現在の子どもが一個のかけがえのない存在として改めて際立ってくるというような変化も生じたのではないか。またそのような経験を今更にしてしまう自分自身への驚嘆もあるかもしれない。十年後ぐらいに同じ記録を読んだら、この著者たちはどのような研究をするのだろうか。

きょうだいの上と下

著者たちが皆きょうだい関係を取り上げながら、上の子どもに注目した人、下の子どもに焦点をあてた人、「ネンネ」というモノとの関係から見ている人と分かれていることも興味深い。同じ上の子の成長でも、入江は「自己喪失の危機」を乗り越えることと見、友定は「自己再編」とし、

微妙な表現の相違がある。

著者自身も指摘するよう

に、下の子を

迎えた時期の年齢差（一年ほどではあるが）のもつ意味は大きいようで、逆にこの時期の発達の機微がうかがえて面白い。巻末の『まとめにかえて』で論じられているが、幼児の行為の中に「建設的」な「意志」を見ることによって、「赤ちゃん返り」というような外見的で消極的な表現は自然解消してしまっている。

上の子どもが自己をとりもどすように見えるのに対して、下の子どもは、人生の始めから世界の一部であった上の子どもを、自分の虚像を映す鏡にしなから、自己という実像をさがし求める旅に放たれているのだな、と橋爪、榎田のパートを読



んで印象づけられた。とすると、あの執拗に繰り返されるわが家のきょうだいげんかは、上の子は上で、下の子は下で、自己を育てるのに一生懸命な姿なのね、と納得する。わかつてはいたはずなのに、だ。この本が、上の子どもに焦点をあてた研究と下の子どものとで半々の構成になっているのも、全体できょうだい相互の健全な姿を印象づけるのに効果的で、成功していると思った。

育児日記と保育学

それぞれの著者に、「なぜ今?」、「なぜ上

(下)の子を?」と、もう一步立ち入って尋ねてみたい。「わが子」の登場する、たとえばピアジェの知能の研究やまだようこによる言語発生に関する研究では、研究テーマと研究者とが論文の上で有機的に交わることはない。それに対して育児日記からの研究は、なぜある時点で、ある視

点を抽出し、あるテーマを引き出したのか、という問題設定をすることによって、研究者が潜在的に抱いている「あるべき保育」像を、3Dのように浮き上がらせられそうだからである。客観的に「よい保育」を評価するのは全然違う。保育を中から創造した人による、それ自体で充足したそれ以外のコースはありえなかった保育を、中から問いなおす視点か、保育の価値を問うことになるはずだ。この本の題名にある「子ども学」は、そんな「保育学」を可能にするのかなとも考えた。

(十文字学園女子短期大学)